

農村部出身者みる「家を継ぐこと」の意味づけ
茨城県北の事例

水嶋陽子（常磐大学）

目的： 老年期の親子は、しばしば、生活支援や介護など福祉的側面から議論されている。高齢者と子どもとの同居が減る中で、とりわけ農村部に居住する親世代にとって家の継承は大きな気がかりであるが、家産や位牌祭祀、墓地、家名など系譜的側面からの親子関係の議論は、さほど多くはない。そうしたなかで農村家族研究において堤（2009）は、対象農家の人の継承を扱い、子世代（大正―昭和前半生まれ）の継承は農業・長男・同居が一セット組み合わせになっていたが、孫世代（昭和中後半生まれ）の継承は必ずしも農業・長男・同居が組み合わせになっていないという。また永野（2005）は、農地が世代的に継承されている限り、農業を継がなくても家を継いでほしいという後継者への期待などが保持されるとする。すなわち先行研究は、主に親の側から家の継承を取り扱っており、近年は同居や家業継承を伴わないなど、それぞれの地域や家族の実情に合わせ、実態としての様々な形で家の継承が行われていることを、共通して指摘する。それらの知見をふまえると、農村部出身で他出した子どもは、自分たちなりのやり方で、親の家を継ぐことを模索していると予想される。しかしこれまで、他出した子どもの側から、家の継承をめぐる実際に親世代とどのような関わり方をしているのかは、さほど明らかではない。

そのためここでは、北関東農村部を出て地方都市に暮らす、壮年期の人々に、焦点をあてる。インタビューデータから、彼らが「家を継ぐこと」を意識するようになるプロセス、また何を継ごうとしているのかを、明らかにしたい。それにより、家に関する様々な内容を一括して継ぐことが難しい中で、農村部出身の他出子たちは、何をすることを「家を継ぐこと」と捉えているのかを、具体的に把握することを目指す。

対象と方法： 調査対象者は茨城県北農村部出身で、親と別居し地方都市に在住する人々である。対象者の多くは、機縁法により紹介を受けている。調査時期は、2024年5月～9月、2025年4～6月である。調査は半構造化インタビューとして行い、主な質問内容は、生い立ちのほか、自身の家との関わり、現在の実親やきょうだいとの関係、家を継ぐことへの見通し等である。調査は常磐大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号100160）。

分析と議論： 「家を継ぐこと」を意識するタイミング： 彼らの多くは出生順やきょうだい構成によって、子どものころから自分が跡継ぎであると認識をしているが、ライフコースの早い段階では、「家を継ぐこと」を具体的に意識していない。「家を継ぐこと」を意識するのは、子どもの誕生や家を建てるというタイミングであり、親やきょうだい、親戚との相互作用がきっかけになるケースが多かった。

彼らは何を継ごうとするのか： 跡継ぎであると認識をしている対象者は、親の高齢化とともに、実家の農地、親の仕事、墓などに関して、自分も関わるようになる。彼らの取り組みから、何をすることが「家を継ぐこと」と捉えられているのかを、把握していきたい。

最後に、限られた事例からではあるが、親の実家から離れて暮らす壮年期の子ども世代は、現在、「家を継ぐこと」にどのような意味付けをしているのかを、考察する。

参考文献： 永野由紀子 2005『現代農村における「家」と女性』刃根出版。

堤マサエ,2009『日本農村家族の持続と変容 ―基層文化を探る社会学的研究―』学文社。

本研究は、JSPS 科研費 JP22K01908 の助成を受けて実施した。

（キーワード：高齢期親子、継承、農村）